

昭和34年10月4日発行の「アサヒグラフ」

「ナイロンザイル論争果てて」の中の藤田氏の記事



大阪大学工学部教授

藤田 軍治 氏 (55)

問題の実験の中心人物 ナイロン・ザイルの材質の分子配列の研究を分担した

「穂高事件には関心がありませんし、岩稜会の態度もさっぱり理解できずじまいでした。あの実験は前まえからやっております。何も穂高事件のためにとくに実験したのではないのです。ナイロン・ザイルの強度については、現にヒマラヤでも各国の登山家が使っており、実用段階に入っているので問題視しませんでした。この事件は岩稜会が遭難に関する発表をおこたり、外部から原因究明に立ち入ってさわいだような感じですね。岩稜会は例えば機関誌上をかりても、計画自体にむりはなかったかどうかなど検討すべきでした。生き残ったものは大へん幸運であるにもかかわらず、その後の出方はまるで自分の幸運を意識していないようですね。もう少し感謝の気持ちがあったらこんな騒ぎにはならなかったでしょう」

3件の

- (1) 穂高事件 (29年12月28日～1月3日) にかけて発生した ナイロンザイル切断事件 には関心がないとありますが F の 英文論文では「この事故のオバは非常にわずかのスリッパで起きている、この様に我が国においてこの事故の原因調査は重大な問題となった」と記述されています。
- (2) 「あの実験は前からやっております、何も穂高事件のためにとくに実験したのではない」となっていますが、この3件のナイロンザイルの切断に関して、ナイロンザイルが岩角で弱くなるのではないかという疑問が生まれ、そこで初めて藤田氏の一連の実験となったのであります。
- (3) その後の記事は、関係のないもので

研究室での

藤田氏が、ナイロンザイルは岩角で弱くなることを実験で知りながら、また穂高の事故原因はそれ以外にあることを知りながら、なぜナイロンザイルは岩角でも強く事故原因はそれ以外ではないという実験も行ったか、また山日記にそのデータを発表したか、その疑問には全く答えていません。さっぱり理解できないというは理解しているという理解できたとは言えないわけですね

ASAHI

THE ASAHI PICTURE NEWS

10
A
1959

ASAHI PICTURE NEWS
10
A
1959
ASAHI PICTURE NEWS
10
A
1959

ナイロン論争 果てて

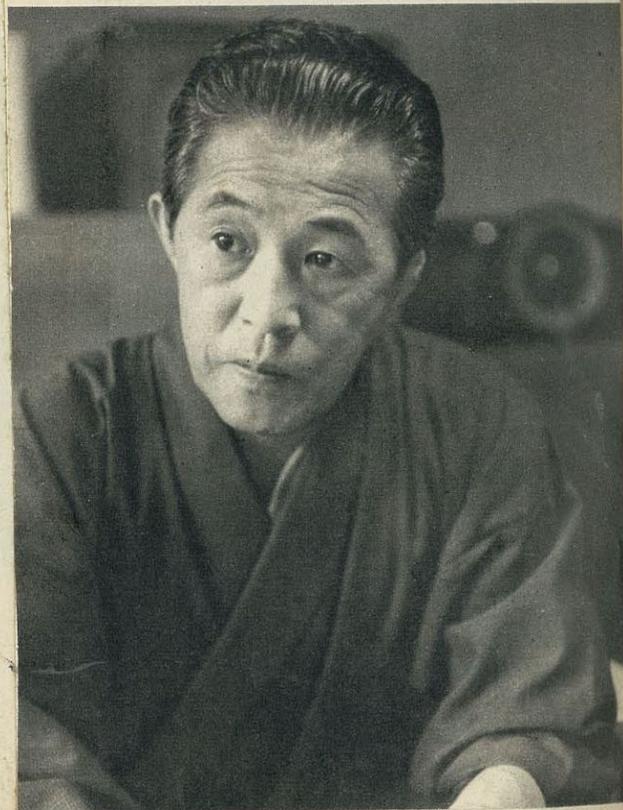
告知板 570

「氷壁」のモデルとして話題を呼んだナイロン・ザイル事件が、四年半にわたる論争にピリオドを打った。この事件は、去る三十年一月二日、北アルプス前穂高岳東壁を登はん中の岩稜会会員若山五朗君（当時19歳名古屋大学一年生）がスリップしてナイロン・ザイルが切れ、墜死したことが発端。同年の四月にザイルの製造元東京製綱蒲郡工場で強度実験を行なったが、その時はザイルは切れなかった。これに対し遭難の当事者岩稜会では、「実験を担当した阪大の篠田教授は予備実験でナイロン・ザイルの弱点を十分承知しながら、実験のときは岩角を丸くして逆の結果を出した。そのために同行者が技術上、人格上の重大な容疑をうけた」として篠田教授を名誉棄損で告訴した。この間、山岳雑誌その他でナイロン・ザイルの強弱をめぐる議論がわいた。告訴は却下されたが、つづいて岩稜会は教授に公開質問状を出したり、民事訴訟の準備をしたりしていた。それが去る八月三十一日、「ナイロン・ザイル事件に終止符をうつにさいしての声明」と題するパンフレット約五百通を関係者に発送し、「私達への不当な疑惑はまったく解決したと考えられるから」として論争の打ち切りを宣言した。そこで長い間にわたって登山界の話題をさらったこの事件の総決算として双方にご登場願った。

作家 井上靖氏 (52)

岩稜会のナイロン・ザイル事件に取材した小説「氷壁」を三十一年秋から翌年にかけて朝日新聞に連載 三十四年二月 この作品で芸術院賞をうけた さちよう面な人柄だけに事件のなりゆきには少なからず心を痛めていた

「私は直接の関係はないわけですが、氷壁で材料をもらったので、この四年半のあいだ、やはりいつも気がかりでした。長いこと争ってきた事件だけに、どうも感情的になってしまった面があるの、困ったものだと思っています。和解の話は昨年からあったのですが、なかなかうまくまとまらなかったのです。双方が握手して笑い合うことができなかつたのは残念ですが、一方的にでも、とにかく論争が終ったことは日本の登山界全体にとっても、ほんとうに喜ばしいことだと思います」



People at left assert that a nylon rope is strong enough, while people at right say it is not satisfactory as a rock climbing equipment. The controversy started when a mountaineer belonging to the "Ganryo Kai" was killed when his nylon rope broke on a peak in 1955. (Left, Top to Bottom: Yoshiaki Koreki (maker of the rope), Gunji Shinoda and Nobuo Kajiwara (scientists) (Right): Shigeo Ishioka (mountaineer), Kunitoshi Ishihara (friend of the victim), and Taro Suga (scientist) (Bottom, middle): novelist Yasushi Inoue.



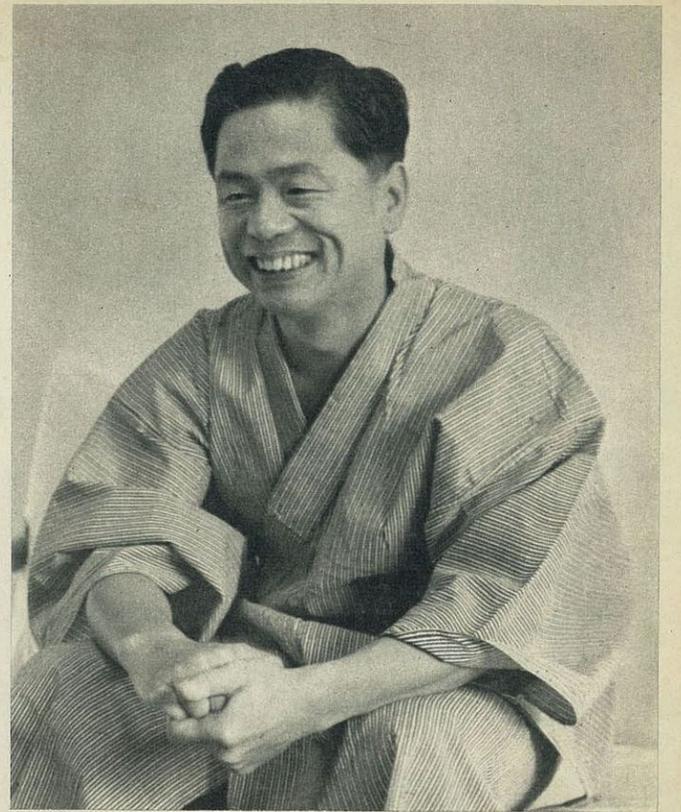
前穂高岳 (3090m) の東壁は、ひ称せられる見事な壁 遭難

約 250 名の絶壁で剣岳のチンネと並、当時はまだ冬の完登記録がなかった

「アサヒグラフ」1959.10.4

岩稜会代表

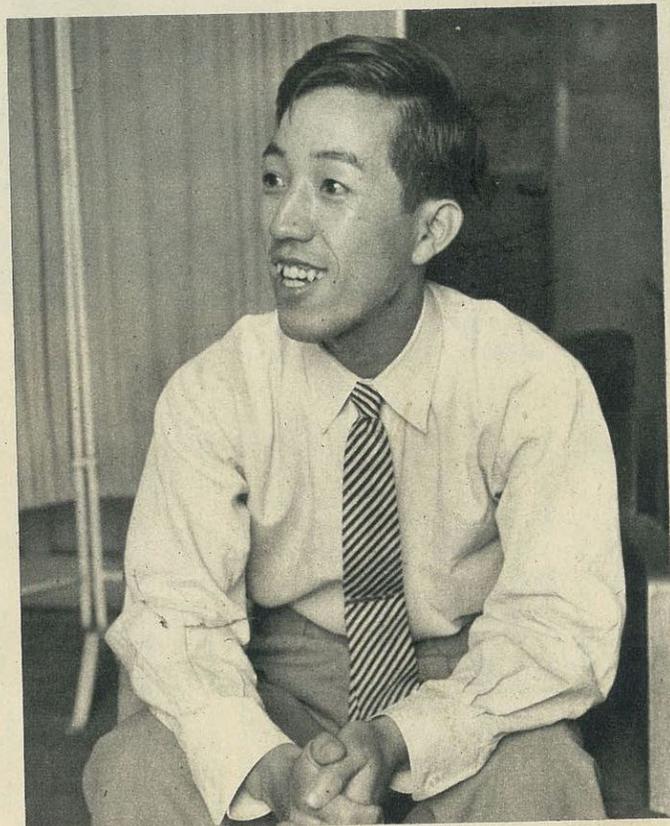
石岡 繁雄 氏 (41)



名古屋大学学生係長 遭難した若山五朗君の実兄
「両者が会って円満解決ができればよかったのですが、それができなかつたので仲介者なしで一方的に声明を出しました。篠田氏は最近になつて、あれは、船舶、飛行機に関する実験でザイルに無関係だ、といひのがれをいっておられるので、もう十分反省されたものと思ひますし、一般の方にもわかつてもらえたのでピリオドにしました。学者が生命にかかわる問題をゆがめて発表した点が問題だったので、互いの人権と生命を尊重する以外に世の中をよくする道はない。そして社会的地位のある人は特にそれを自覚してもらいたい。この四年半の費用は約八十万円、各方面に出した手紙の数は二千五百通、五十人の会員がよく協力しました。重荷がおりたので、さっそくヒマラヤを計画したいと張切っています」

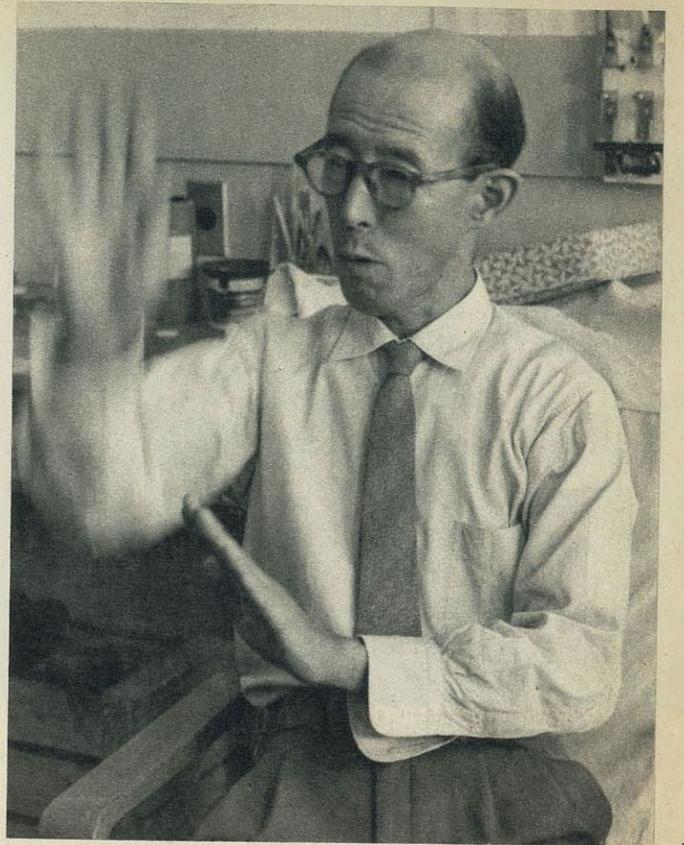
岩稜会会員

石原 国利 氏 (28)



名大学生部勤務 遭難のときのリーダー 当時中央大学四年生 遭難後凍傷のため一カ月ほど入院した。もう一人のメンバー沢田栄介氏はいま国立公園の管理人として立山にいる。
「私たちはザイルの強弱を問題にしていたのではないのです。ナイロン・ザイルの長所、短所はもうはつきりしています。それよりも真実を曲げて発表した人々の行為が社会的に問題なのです。当時ある有名な山岳家が「誰もいらないところで起きた事件だからツミをナイロンにきせたい。気持はよくわかるが」と雑誌に書いたり、ずいぶん冷たい目で見られて苦しい思いをしました。でも今はほとんどの方にわかつてもらえたと信じています。弱い者いじめをされても泣き寝入りせずに大いに訴えるべきです。登山家は山で真剣になると同様、下界でも真剣に生きなければなりませんから」

須賀太郎氏 (57)



岩稜会顧問 遭難直後岩稜会独自の実験を指導し この時はザイルはあっさりと切れた

「世界の山岳界がナイロン・ザイル時代に入っていることは私たちも十分知っています。そして私たちもナイロンを葬り去ろうという気はありません。強化のための実験に大いに協力しようと思っています。でも外国で流行しているからといって無条件にとり入れるのは考えものです。ナイロンはひっぱりと衝撃に対しては麻より強いのですが、エッジに弱いので、ザラザラしたエッジの多い山では特に注意しなければいけないと考えます。こういう欠点をひたかくしにして、ただ使い方が悪かったとばかりいわれたのでは容認できません」

東京製綱取締役

是木義朗氏 (48)



問題の実験をやったときの東京製綱蒲郡工場長 昨年末から東京に転勤 去る八月初めから病気のため 東京順天堂病院に入院中
「彼らもう機嫌をなおすべきですよね 登山界というところはもう少しスマートかと思っていたんですがね この論争で残念に思ったことは、このためにナイロン・ザイルにひじょうに不安が持たれ 発展がおくれてしまったことです。ここ二、三年外国では麻ザイルなどほとんど使っていません。ところが日本では九五%が麻ザイルです。その意味でも論争が終ってよかったですよ。これから正常な研究ができますからね。ナイロン・ザイルを売るときは一つ一つに詳しい指導書をつけていますから安心して大いに利用してもらいたいですね」

篠田軍治氏 (55)

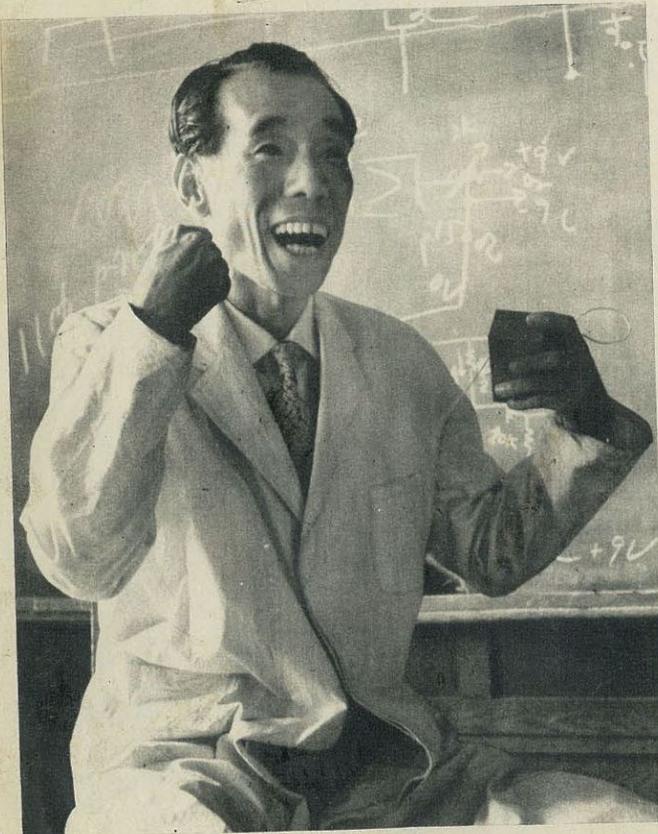


問題の実験の中心人物 ナイロン・ザイルの材質の分子配列の研究を分担した

「穂高事件には関心がありませんし、岩稜会の態度もさっぱり理解できずじまいでした。あの実験は前まえからやっております。何も穂高事件のためにとくに実験したのではないのです。ナイロン・ザイルの強度については、現にヒマラヤでも各国の登山家を使っており、実用段階に入っているので問題視しませんでした。この事件は岩稜会が遭難に関する発表をおこたり、外部から原因究明に立ち入ってさわいだような感じですね。岩稜会は例えば機関誌をかりてでも、計画自体にむりはなかったかどうかなど検討すべきでした。生き残ったものは大へん幸運であるにもかかわらず、その後の出方はまるで自分の幸運を意識していないようですね。もう少し感謝の気持があったらこんな騒ぎにはならなかったでしょう」

応用技術調査会理事

梶原信男氏 (48)



阪大工学部篠田研究室所属 ロープの研究は東京製綱の依頼で自衛

隊の掃海索の研究をやったのがはじまり 問題の実験では力学的な

面とザイルの作り方に対する研究を分担した

「こちらが相手にしなかったので嘸みあきたんでしょう。まるで東京製

綱の回しものようにいうんですが、まったく見当ちがいで迷惑しまし

た。なにしろえらい目にあつたものです。私はなにもナイロンが切れな

いといったわけではないし、たまたま東京製綱の依頼でロープ全般のテ

ストをやつたまでです。なにも穂高事件のための実験ではありませんよ

ロープの実験は抗張力 衝撃力 連続荷重 反復荷重 剪断力などを調

べるのですが、設定条件の如何で時には五十歩も誤差があるので、非常

にむずかしいのです」